

大学生の「生き方志向」と 保護者の養育に対する認知について

高山 育子・永茂 ころこ

A Study of the Relationship Between “Life-orientation”
and the Recognition of Parenting Attitudes:
Based on a Survey Analysis of Junior College Students

TAKAYAMA Ikuko and NAGAMO Kokoro

Summary: In this study, we conducted a questionnaire survey using “life-orientation” and PBI (Parental Bonding Instrument) and examined how the relationship between children and caregivers affects the process of child growth. As a result, when the parent’s attitude is evaluated as affectionate and conscious about the child’s independence, “life-orientation” was high. This supports the findings from preceding experiment. In the case of junior college students, it was found that those who have clear future goals and professional experience in the practical training are better equipped with interpersonal skills. This work in self growth infers their “life-orientation”.

Key Words: “Life-orientation”, PBI, junior college students, survey analysis

要約: 本研究は、保護者や保育者などの養育者と子どもの関係が、子どもが成長する過程でどのような影響を与えるかについて、「生き方志向」と PBI (Parental Bonding Instrument) を用いて調査票調査を実施し、得られた結果にもとづいて考察をおこなった。この結果、保護者の養育態度は子どもの自立をうながすような愛情をもったものであったと子ども自身が評価している場合に、「生き方志向」が高いという、先行研究と同じ結果が得られた。

ここから、大学生の場合、在学中に資格・免許を取得するなどして将来像が明確である場合や、専門的学修や実習を経て保育者として必要な人間関係調整能力等における自己の成長を実感することが、「生き方志向」を高めていると推察できる。

キーワード: 「生き方志向」、PBI、大学生、アンケート分析

1. 研究目的

1.1. 問題の設定

幼児期は、生涯にわたる人格形成にとってきわめて重要な時期であり、保育所や幼稚園では、子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために、子どもの主体性を尊重した援助や関わりが求められる。『保育所保

育指針解説』には、第一章「保育の基本原則」の「保育の方法」について、「保育に当たっては、一人一人の子どもの主体性を尊重し、子どもの自己肯定感が育まれるよう対応していくことが重要である」と記されている（厚生労働省編 2018, p.21）。主体性とは自分の意思を表現し、意欲をもって自ら周囲の環境に関わっていかうとする態度や姿勢であり、このような主体性は子どもが信頼する身近な大人のもとで安心して過ごすことで

養うことができるものである。

本研究では、このような重要な幼児期に、保護者や保育者など子どもの養育者（以下「養育者」とする）と子どもの関係が、子どもが成長する過程でどのような影響を与えるかについて、調査票調査から得られた結果にもとづいて考察する。養育者のなかでも、子どもの第一愛着対象者は子どもの心に内在化することで子どもの安心基地となり、子どもが成長するうえで大切な支えとなる存在である。養育者が生活のなかで行うなにげない発話や行動が子どもの思考や行動、自己の評価に大きく作用する。そのため、幼稚園や保育所の保育者は人的環境としての自己の言動に意識を向けるが、一方で、養育者の言動は養育者の主観どおりに、あるいは客観的（また量的）に観察可能なままで子どもに届くとは限らず、子ども自身が主観的にどのように捉え、受け止めているのかによってその影響も異なるであろう。つまり、発信された養育者の言動は、養育者と子どもとの関係性のなかで子どもに受信され、意味づけされて子どもの人格を形成していくと考えられる。また、その意味づけは、両者の関係性が変容したり、子どもが成長することによっても変化すると考えられる。

本研究では、幼児期の子どもが愛着を育む必要性や重要性について触れながら、子どもが認知する第一愛着対象者（the initial attachment）の養育態度が、子ども期から青年期になる自己意識にどのように関わるのか明らかにしていきたい。

1.2. 先行研究について

愛着について、斎藤ら（2021）は、愛着とは子どもと特定の存在との間に形成される情緒的な関係で、愛着対象となった人から十分なスキンシップや共感的で豊かな反応を伴った関わりを持たれることによって子どもに安心感と満足感がもたらされ、安定した愛着が形成されていき、安定した愛着が形成されていくにしたがって安心感と信頼感が子どもの心に内在化される、と説明している（p.151）。さらに、愛着は①対人関係の土台、②

自己調節の土台、③発達の土台、④自己形成の土台、⑤ストレス耐性の土台、つまり生きる力を支えるところの根幹となると述べている（p.153）。また、愛着が満たされない時について、親子のつながりが分断されるような状況が繰り返され、お互いの心が情緒的につながらない状態が続くと、愛着が不安定になる。愛着が不十分・不安定だと子ども本来の人格形成がうまくいかなかったり情緒面が不安定になったりする。このため、「大切にされている」、「理解してもらえている」という感覚が内在化する必要があり、また、安定した愛着は対人関係を安定したものにすると述べている（p.156）。

また鳥（2014）は、M. D. Ainsworth らの研究をもとに「親が子どもの要求に対して敏感に応答する傾向にあると、子どものアタッチメント行動は安定したものになることが多い」（p.261）と記している。

このように、愛着は人格形成の基盤であり、安定した対人関係を築くこと、および精神の安定に必要となることが分かる。こうした幼児期の愛着がもととなって青年期の自己意識が形成されていくと考えられる。

次に、親子関係、つまり保護者が子どもの人格形成にどのように関わるのかについて先行研究をまとめる。浴野（2015）では、親子臨床心理面接を行い、親の情緒的発達と子どもの心の組成について研究しており、その中で親の相互的態度が乳児の心の状態や外界へのイメージの基礎となると述べている。さらに、親は育児の際に過去の自分自身の親との関係が賦活され、特にその体験に心理的葛藤が強い場合、その葛藤が子どもとの関係形成に影響し、その情緒状態に問題が生じる可能性があるとも述べている。

鳥（2014）は、先行研究から、母親の内的作業モデル（internal working model）は親の養育態度についての母子双方の認知を介して子どもに伝達されるが、直接的には子どもが親の養育態度をどのように認知しているかが子どもの内的作業モデルに影響を与えていると考えている。

次に、保護者の子どもに与える影響について量的調査にもとづいて検討した先行研究をまとめる。戸田（1990）は、親の実際の態度（客観的環境）が直接子どもの性格や行動に影響する場合と、親の実際の態度が子どもの中で情報処理され、その認知された親の態度（主観的環境）が子どもの行動に影響する場合の2通りがあるとし、後者の立場で、女子大学生200名に対して自身の研究で構成した Internal Working Models（IWM-自己及び他者に関する表象）に関する項目と、親の養育態度について質問紙で調査を行っている。分析結果、初期の愛着関係によって作られた IWM のなかにその出来事が同化することで、より複雑な認知構造へと発達すると考察している。

森下・阿部（2013）では、母親と父親のかかわりの特徴が、子どもの社会性の発達にどのような影響を与えるかを明らかにし、それとは逆に子どもの社会性の特徴が、親のかかわりの特徴にどのような影響をおよぼすか、そこにどのような相互連関があるかを探ることを目的としている。

これらの先行研究により、本研究で用いる「充実感」は、子どもの性格や志向性など子ども自身の内面に大きく左右されるものと考え、主観的環境に着目する。

2. 研究方法

2.1. 使用する尺度について

(1) 「PBI（養育態度についての認知）」と「生き方受容尺度」について

青年期の子どもの自己意識と認知する第一愛着対象者（養育者）の養育態度の関連を明らかにするため、本研究では質問紙調査を行う。調査票は、先行研究にもとづいて、「生き方受容尺度」（計40項目、「とてもよくあてはまる」から「ほとんどあてはまらない」5件法）と「PBI（Parental Bonding Instrument）」（計25項目、「非常にそうだ」から「まったくちがう」までの4件法）を用いて作成する。

「生き方受容尺度」とは、三川（2002）が作成

した尺度で、充実感、肯定的評価、有能感、達成感で構成されており、それぞれ10項目ある。

子どもが認知する保護者の養育態度については、G. Parkerらが作成した養育態度に関する尺度PBIを小川（1994）が翻訳したものを使用する。これは、子どもが保護者から受けた養育態度を測定する尺度である。翻訳は、小川（1994）以外にもあるが、今回主に参考とする先行研究の山下ら（2010）でも使用しているため、本研究でも小川（1994）の訳を用いる。因子においては、原語版では「ケア」と「過保護」の2因子で構成されているが、山下ら（2010）の「冷淡と干渉」、「無関心」、「情愛と過保護」、「情愛と自立承認」の4因子を用いる。

PBIを用いた研究には、16歳までに受けた保護者の養育態度を測定するもの（尾花ら2022）があるが、本研究は小学生のころに限定して主な養育者について回答を求めた。これは、調査対象者に様々な家庭背景が想定されること（16歳までに「保護者」との関係性が変容がしているため回答しづらいや、複数の「保護者」がいる、「保護者」の態度が変容したなど）ため、「保護者」による養育がもっとも必要な時期に限定して回答を求めることとした。

分析・考察に際して、主に参照するのは山下ら（2010）と三川（2002）である。山下ら（2010）は両親の養育態度、特に「過保護」という養育態度に着目し、大学生の親子関係、自尊感情、生き方志向の関連について検討している。また、PBIを「冷淡と干渉」、「情愛と過保護」、「情愛と自律承認」、「無関心」の4つのタイプに分類し、「現在の親子関係」、「自尊感情」、「生き方志向」のそれぞれとの関連を明らかにしている。

「生き方志向」得点は男女に有意差はなく、PBIタイプとの関連の分析は男女分けずに行われている。その結果、母親では、過保護軸で高群の方が「生き方志向」の平均値は低く、父親では、過保護軸で高群でも愛情軸で低群の場合のみ平均値の低いことが明らかにされている。

三川（2002）では、「生き方」と「生きがい」

の関係について検討することを目的とし、生涯キャリア発達における個人の「生き方」を「生き方志向性」の視点から明らかにするために、尺度の開発と研究を行っている。「生きがい」については、三川が過去の自身の研究で用いた「役割受容尺度」を参考に、生き方や人生に対する充実感・肯定的評価・有能感・達成感を内容とした「生き方受容尺度」を考案している。

本研究では、養育態度に対する認知と現在の充実感の関連を明らかにするため、上記の先行研究で使用されている養育態度に関する尺度である PBI と充実感、肯定的評価、有能感、達成感を内容とした「生き方受容尺度」を使用する。

なお、山下ら (2010) では、保護者を父親と母親に分けて調査を行っているが、さまざまな家庭背景があることを考慮し、回答者に保護者のうち 1 人を「養育者」として選び回答してもらうこととする。また、これまでの複数の先行研究では、PBI タイプと生き方受容との関連において男女の有意差が見られていない。そのため、男女を分けずに分析を行うよう質問項目を設計した。

この PBI (Q4) と「生き方受容尺度」(Q5) に、回答者の性別 (Q1)、学年 (Q2) と PBI を回答する際念頭に置く「養育者」を尋ねる Q3 で調査票を作成した。なお、調査票は参考資料として添付している。

2.2. 調査概要

(1) 調査対象者

調査対象は、私立 A 短期大学の A 学部に在籍する 1、2 年生全員である。調査は、2022 年 10 月中旬に実施した。調査は、回収率を高めるため、また、倫理的観点から、以下の手順で実施した。各学年の必修授業のクラスごとに休み時間の教室に行き、調査の趣旨を説明し協力を依頼する。その際、回答は任意であることについても説明をする。回収箱を設置しておき、そこに提出するように求める。回収率を高めるために、1 週間後の同じ時間に同じ教室に行き、未提出の場合は提出を求め、休み時間に教室にいなかった学生

(欠席者も含む) がいたら、調査票を配布して、口頭で説明をして協力を依頼する。上記について、休み時間の前後の授業を担当している教員に事前に許可を得ておく。調査票は封筒に入れて配布し、回収時にも同じ封筒に入れて提出するように伝える。

私立 A 短期大学 A 学部は保育者養成課程であり、幼稚園教諭免許状と保育士資格が取得でき、ほぼ全員が両免許・資格を取得して卒業する。

(2) 調査実施に関する倫理的配慮

通常の倫理的配慮に加え、個人的な背景を含む意見を聴取する内容であることから、筆跡等による追跡等のおそれを感じさせないために、自由記述は回答必須項目では設定していない。また、回答の負担を考慮し、最小限の問題数・項目数としている。

調査の実施については、頌栄短期大学倫理審査委員会の承認を得ている。

(3) 分析方法

統計分析には SPSS22.0 を用いる。基礎集計の他、「養育態度」によって回答者をグループ化し、グループごとに「生き方志向」の平均を比較・分析し、考察を行う。

(4) 充実感について

尾花ら (2022) はアイデンティティについて、個人の心身の状態にも関連する要因であると推察している。「アイデンティティは、自分にとって重要な他者や集団からの承認の中による、他者との関係性から成り立つものであり、重要な他者である両親や友人、恋人との関係性は必要不可欠とされる」(p.165) とまとめている。

これらのことから、集団で重要な他者と過ごす大学生のアイデンティティは大学生の充実感に大きく影響していると捉える。また、三川 (2002) が作成した「生き方受容尺度」の「私は、自分の生き方に満足している」や「私は、このままの生き方で人生を終わらせたくないと思う」などの今の生き方について問う充実感の質問内容から、三川 (2002) の「生き方や人生に対する充実感」を十分に感じられている状態を、自分にとって重要

な他者や集団からの承認されており、自分の人生に対して満足感を持って生きている状態と定義する。

(5) 仮説

主な仮説は次の2つである。

仮説1. 二宮(1994)によれば、養育態度についての認知と「充実感」について、それぞれの因子分布と関係性について、所属する学部(文学部、経営学部、法学部、歯学部)によって異なることがわかっている。本調査対象者は、教員免許および国家資格を取得して就職するという点において、文学部よりも歯学部に近いのではないかと考えている。

仮説2. 宮沢(1982)によれば、四年制大学教育学部のなかでも2年生と3年生では自己受容は異なっており、その理由として実習経験が挙げられている。このことから、本調査でも1年生と2年生では異なる。

3. 調査の結果と分析

3.1. 基礎集計

調査票は、1年生94通、2年生96通の合計190通配布した。回収数は1年生93名、2年生89名であった。そのなかから、Q4(PBI)、Q5(生き方志向)で1つでも回答していない項目がある回答者は分析から除外したため、有効回収数は1年生77名、2年生81名であった。したがって有効回収率は、1年生81.1%、2年生84.4%、合計83.2%である(表2)。

回答者の性別は女性が97.5%である(表1)。小学生の頃の主な養育者は母が91.1%である(表3)。表4はPBIの、表5は生き方志向についての基礎集計表である。

4. 調査結果

4.1. PBIについて

養育者(Q3)を母親以外と選択した回答者は、Q4、Q5の回答傾向に特徴が見られる(外れ値)

表1 回答者の性別(Q1)

	人数(%)
女性	154(97.5)
男性	3(1.9)
その他	1(0.6)
合計	158(100.0)

表2 回答者の学年(Q2)

	配布数	回収数	有効回答数	有効回収率
1年	94	93	77	81.1%
2年	96	89	81	84.4%
合計	190	182	158	83.2%

表3 小学生の頃の「養育者」*(Q3)

	人数(%)
母	144(91.1)
父	9(5.7)
祖母	2(1.3)
祖父	0(0.0)
その他	3(1.9)
合計	158(100.0)

*質問項目では「小学生のころ、あなたにもっとも影響を与えた保護者」としている。

ケースがあったため、以下の分析からは除外することとした。この結果、Q3で「母」と回答した144名(1年生、2年生各72名。女性140名、男性3名、その他1名)を分析対象とする。

山下ら(2010)のPBI「愛情・共感」12項目、「過保護・過干渉・統制」13項目を参考にPBIの平均値を上位12項目、下位13項目に分けた。上位の12項目中「過保護因子」、「養護因子」はともに6項目であった。下位13項目は、「過保護因子」5項目、「養護因子」8項目であった。上位の「養護因子」は、自分に「理解を示してくれた」や「気分をほぐしてくれた」などの精神的なケアや、「楽しんだ」「微笑みかけた」など子どもと養育者の直接的な関わりから愛情を感じていたと思われる項目であった。過保護因子は、「させてくれた」「与えてくれた」というような表現が用いられている項目であることから、親からの一方的な関わりや受動的な姿勢があると考えられる。また、

表 4 PBI の基礎集計 (Q4)

	非常にそうだ	そうだ	ちがう	まったくちがう
Q4 (1)	88 (55.7)	65 (41.1)	5 (3.2)	0 (0.0)
Q4 (2)	5 (3.2)	12 (7.6)	69 (43.7)	72 (45.6)
Q4 (3)	85 (53.8)	54 (34.2)	4 (2.5)	1 (0.6)
Q4 (4)*	1 (0.6)	5 (3.2)	65 (41.1)	87 (55.1)
Q4 (5)	82 (51.9)	60 (38.0)	13 (8.2)	3 (1.9)
Q4 (6)	95 (60.1)	57 (36.1)	6 (3.8)	0 (0.0)
Q4 (7)	52 (32.9)	72 (45.6)	27 (17.1)	7 (4.4)
Q4 (8)*	1 (0.6)	2 (1.3)	36 (22.8)	119 (75.3)
Q4 (9)*	3 (1.9)	13 (8.2)	40 (25.3)	102 (64.6)
Q4 (10)*	3 (1.9)	8 (5.1)	29 (18.4)	118 (74.7)
Q4 (11)	94 (59.5)	48 (30.4)	14 (8.9)	2 (1.3)
Q4 (12)	95 (60.1)	50 (31.6)	1 (0.6)	2 (1.3)
Q4 (13)*	10 (6.3)	53 (33.4)	71 (44.9)	24 (15.2)
Q4 (14)*	3 (1.9)	11 (7.0)	63 (39.9)	81 (51.3)
Q4 (15)	40 (25.3)	81 (51.3)	30 (19.0)	7 (4.4)
Q4 (16)*	2 (1.3)	8 (5.1)	46 (29.1)	102 (64.6)
Q4 (17)	57 (36.1)	66 (41.8)	29 (18.4)	6 (3.8)
Q4 (18)*	3 (1.9)	10 (6.3)	36 (22.8)	109 (69.0)
Q4 (19)*	3 (1.9)	3 (1.9)	53 (33.5)	99 (62.7)
Q4 (20)*	26 (16.5)	47 (29.7)	51 (32.2)	34 (21.5)
Q4 (21)	42 (26.6)	80 (50.6)	30 (19.0)	6 (3.8)
Q4 (22)	45 (28.5)	67 (42.4)	37 (23.4)	9 (5.7)
Q4 (23)*	33 (20.9)	45 (28.5)	51 (32.2)	29 (18.4)
Q4 (24)*	3 (1.9)	3 (1.9)	50 (31.6)	102 (64.6)
Q4 (25)	91 (57.6)	50 (31.6)	14 (8.9)	3 (1.9)

*は反転項目

子ども自身の欲求が満たされるような関わりをされていたと思われる項目と考える。

先行研究では、愛情得点が中央値より低ければ「保護的」、高ければ「無関心・冷淡」とし、過保護得点が中央値より高ければ「過保護」、低ければ「自律の承認」とし、愛情軸と過保護軸の2つの次元で4タイプに分類している。本研究はこの分類法を使用した。

愛情得点が17以下の77名が「保護的」、18以上の67名が「無関心・冷淡」に分けられた。過保護得点は38以下と39以上で2グループに分類した。38以下の71名が「過保護」、39以上の73名が「自律の承認」となった。

この2つの分類を軸として、山下ら(2010)と同様に対象者を「情愛と過保護」(18.1%)、「情

愛と自立承認」51名(35.4%)、「冷淡と干渉」45名(31.3%)「無関心」22名(15.3%)に分類した(図1)。この結果を山下ら(2010)の母親のPBIタイプと比較すると、「情愛と過保護」は22.1%に対し18.1%、「情愛と自立承認」は32.3%に対し35.4%、「冷淡と干渉」は35.0%に対し31.3%、「無関心」は10.6%に対し15.3%という結果となった。今回の対象者は「自立の承認」に分類されるケースが山下ら(2010)よりやや多いものの、おおむね4つのタイプに分類できた。以下ではこの分類ごとに生き方受容との関連を見ていく。

4.2. 生き方受容の特徴

表6は、「生き方受容尺度」の結果を示したも

表5 生き方受容尺度の基礎集計 (Q5)

	とてもよく あてはまる	あてはまる	どちらとも いえない	あてはまらない	ほとんど あてはまらない
Q5 (1)	31 (19.6)	66 (41.8)	39 (24.7)	6 (3.8)	2 (1.3)
Q5 (2)	29 (18.4)	67 (42.4)	50 (31.6)	10 (6.3)	2 (1.3)
Q5 (3)	21 (13.3)	32 (20.3)	76 (48.1)	22 (13.9)	6 (3.8)
Q5 (4)	23 (14.6)	46 (29.1)	61 (38.6)	24 (15.2)	4 (2.5)
Q5 (5)	28 (17.7)	56 (35.4)	49 (31.0)	23 (14.6)	2 (1.3)
Q5 (6)	23 (14.6)	48 (30.4)	68 (43.0)	15 (9.5)	4 (2.5)
Q5 (7)	45 (28.5)	82 (51.8)	22 (13.9)	7 (4.4)	2 (1.3)
Q5 (8)	56 (35.4)	82 (51.9)	37 (23.4)	10 (6.3)	3 (1.9)
Q5 (9)*	14 (8.9)	46 (29.1)	52 (32.9)	35 (22.6)	11 (7.0)
Q5 (10)*	13 (8.2)	41 (25.9)	42 (26.5)	38 (24.1)	24 (15.2)
Q5 (11)	50 (31.6)	59 (37.3)	39 (24.7)	5 (3.1)	2 (1.3)
Q5 (12)	25 (15.8)	47 (29.7)	67 (42.4)	17 (10.8)	2 (1.3)
Q5 (13)*	9 (5.7)	36 (22.8)	56 (35.4)	47 (29.7)	10 (6.3)
Q5 (14)*	3 (1.9)	19 (12.0)	38 (24.1)	70 (44.3)	28 (17.7)
Q5 (15)	34 (21.5)	86 (54.4)	22 (13.9)	16 (10.1)	1 (0.6)
Q5 (16)	31 (19.6)	55 (34.8)	48 (30.4)	17 (10.8)	7 (4.4)
Q5 (17)	32 (20.3)	81 (51.3)	36 (22.8)	8 (5.1)	1 (0.6)
Q5 (18)*	5 (3.1)	14 (8.9)	48 (30.4)	69 (43.7)	22 (13.9)
Q5 (19)*	11 (7.0)	44 (27.8)	32 (20.3)	48 (30.4)	23 (14.6)
Q5 (20)	17 (10.8)	58 (36.7)	63 (39.9)	16 (10.1)	4 (2.5)
Q5 (21)	18 (11.4)	54 (34.2)	58 (36.7)	23 (14.6)	5 (3.1)
Q5 (22)*	2 (1.3)	8 (5.1)	34 (21.5)	88 (55.7)	26 (16.5)
Q5 (23)*	5 (3.2)	28 (17.7)	42 (26.5)	55 (34.8)	28 (17.7)
Q5 (24)	16 (10.1)	32 (20.3)	66 (41.8)	36 (22.8)	8 (5.1)
Q5 (25)	47 (29.7)	77 (48.7)	23 (14.6)	10 (6.3)	1 (0.6)
Q5 (26)*	14 (8.9)	31 (19.6)	53 (33.5)	38 (24.1)	22 (13.9)
Q5 (27)*	30 (19.0)	55 (34.8)	42 (26.5)	25 (15.8)	6 (3.8)
Q5 (28)	30 (19.0)	76 (48.1)	10 (6.3)	9 (5.7)	3 (1.9)
Q5 (29)*	48 (30.4)	40 (25.3)	50 (31.6)	16 (10.1)	14 (8.9)
Q5 (30)	10 (6.3)	27 (17.1)	75 (47.5)	33 (20.8)	13 (8.2)
Q5 (31)*	16 (10.1)	56 (35.4)	44 (27.8)	29 (18.4)	10 (6.3)
Q5 (32)*	18 (11.4)	51 (32.3)	44 (27.8)	32 (20.3)	13 (8.2)
Q5 (33)	32 (20.3)	66 (41.8)	47 (29.7)	10 (6.3)	3 (1.8)
Q5 (34)*	7 (4.4)	8 (5.1)	35 (22.2)	65 (41.1)	43 (27.2)
Q5 (35)	43 (27.2)	56 (35.4)	49 (31.0)	10 (6.3)	0 (0.0)
Q5 (36)*	18 (11.4)	35 (22.2)	58 (36.7)	32 (20.3)	15 (9.5)
Q5 (37)	32 (20.3)	63 (39.9)	51 (32.3)	10 (6.3)	2 (1.3)
Q5 (38)*	10 (6.3)	50 (31.6)	50 (31.6)	34 (21.5)	14 (8.9)
Q5 (39)	22 (13.9)	44 (27.8)	74 (46.8)	18 (11.4)	0 (0.0)
Q5 (40)*	3 (1.8)	7 (4.4)	41 (25.9)	62 (39.2)	45 (28.5)

*は反転項目

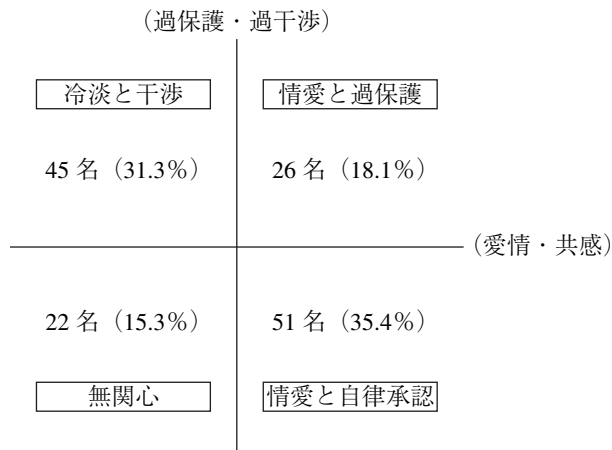


図1 母親の養育態度のタイプ分類 (n=144)

のである。左の4列(大学生男性、大学生女性、社会人男性、社会人女性)は、三川(2002)を転記している。今回の調査結果は最右列に示した。信頼性係数(α 係数)は充実感で0.853、肯定的評価で0.796、有能感で0.854、達成感で0.837であった。

三川(2002)の結果と比較すると、本調査対象学生は三川(2002)が示した「大学生女性」や「社会人女性」の結果よりも高い数値を示している。データの信頼性係数は高いため、「生き方受容」は、約20年前よりも高くなっているか、あるいは今回の調査対象者の「生き方受容」が高いということになる。前者と後者の解釈について妥当性を検証することは難しいが、後者についての解釈を試みる。

三川(2002)は、生き方志向には、「自己成長志向」、「社会的関係志向」、「創造的変化志向」、「生活安定志向」、「職業的評価志向」の5つの側面があるとしている。さらに、「生き方志向」が年齢によって変化していることを明らかにしている。三川(2002)で研究対象とされている「大学

生女子」がどの学部にも所属しているかは記載されていないが、本調査対象者の学生は、二宮(1994)における歯学部学生と同様に、在学中に資格・免許を取得するなどして、将来像がその他の学部・学科よりも明確である。また、専門的学習や実習を経て保育者として必要な人間関係調整能力等における自己の成長を実感することが、「自己成長志向」や「社会的関係志向」、「職業的評価志向」などを高めているのではないかと推測できる。このため、対象者の将来像が明確であり目的に向けて行動している者が多いため表6のような結果になったのではないだろうか。

つぎに、「生き方受容尺度」とPBIの関係をみてみると、全ての項目で養育タイプ別に算出した平均値には、有意差があった(表7)。「充実感」、「肯定的評価」、「有能感」、「達成感」のいずれの項目でも「情愛と自立承認タイプ」で一番値が大きい。次に「情愛と過保護タイプ」、「無関心タイプ」となり、最後が「冷淡と干渉タイプ」である(表7)。山下ら(2010)の結果でも、生き方得点において養育態度は本研究と同じ並び順であった(p.24)。山下らは、「過保護が積極的な生き方思考を持つことにネガティブな影響を与える可能性を示唆している」また、「過保護でなかった方が自己の成長や可能性を積極的に開発していく姿勢を持ち、自己に対して柔軟性を持つことができる」と考えられる」と考察している(p.25)。このことは、今回の調査からも確認できた。

しかしながら、統計分析の手法ではないが敢えて、傾向差に当てはまらないケースを算出してみたい。PBIの4タイプで情愛と過保護に分類されている回答者26名のうち、15人が生き方に「自信が持てない」や「ものたりなさ」を感じる等の

表6 生き方受容尺度の平均値(標準偏差)〈先行研究との比較〉

	大学生男性	大学生女性	社会人男性	社会人女性	今回調査
充実感	29.93 (6.76)	28.75 (7.08)	30.52 (6.84)	28.39 (5.64)	34.60 (6.24)
肯定的評価	32.94 (6.21)	32.67 (6.34)	35.06 (6.06)	33.51 (5.05)	34.50 (6.00)
有能感	33.23 (6.78)	31.81 (6.59)	34.41 (6.08)	32.74 (5.59)	34.54 (6.52)
達成感	30.76 (5.96)	30.01 (6.14)	31.74 (5.45)	29.28 (4.54)	34.35 (6.34)

最右列が今回の調査結果。左側3列は三川(2002)表2より引用。

表7 養育態度別にみた「生き方志向」の平均値（標準偏差）

養育態度タイプ	Q5 充実感	Q5 肯定的評価	Q5 有能感	Q5 達成感
情愛と過保護 (n=26)	34.5 (5.5)	35.2 (5.1)	35.7 (5.6)	35.7 (5.4)
情愛と自立承認 (n=51)	38.1 (6.5)	37.9 (5.5)	37.8 (6.8)	37.7 (5.4)
無関心 (n=22)	33.5 (5.5)	32.9 (6.2)	32.2 (6.4)	32.0 (5.0)
冷淡と干渉 (n=45)	31.2 (4.6)	31.0 (4.8)	31.4 (4.5)	30.9 (4.8)
合計 (n=144)	34.6 (6.2)	34.5 (6.0)	34.5 (6.5)	34.4 (6.3)
F 値	12.2***	14.2***	10.8***	13.4***

***<.001

自分の生き方に対して不満がある、自信がないという項目に「とてもよくあてはまる」「あてはまる」と回答している。しかし、生き方に「満足している」「誇りを持っている」という項目に9人があてはまると回答している。

「情愛と自立承認」に分類された回答者51名のうち、23名がこれからに人生を「楽しみにしている」「素晴らしいものにする自信がある」といった未来志向で肯定的な2つの項目に「とてもよくあてはまる」「あてはまる」と回答し、7名がこれらの項目に「どちらともいえない」「あてはまらない」と回答している。上記の23名のうち19名は「充実した人生を送っていると思う」に当てはまると回答しており4名は「どちらともいえない」「あてはまらない」と回答している。

本研究で使用した「生き方受容尺度」は山下ら(2010)で使用されている尺度とは異なるが、生き方という点においては同等とみなすと、山下ら(2010)の「過保護」が生き方思考にネガティブな影響を与え、過保護でない方が自己に肯定的であるという結果と合致する。しかしながら、少数ではあるが、それとは反対の傾向を持つ人がいるということが示されている。また、本研究の中心である大学生の充実感については、少数ではあるが、最も高い「情愛と自立承認」の中で、さらに未来志向で肯定的な回答をしていても現在の生き方に充実感を感じていない人がいることがわか

表8 生き方受容尺度(Q5) 学年による違い

	学年	平均値 (標準偏差)	F 値
Q5 充実感	1年	34.0 (6.5)	0.179*
	2年	35.2 (5.9)	
Q5 肯定的評価	1年	34.1 (6.5)	0.888
	2年	34.9 (5.4)	
Q5 有能感	1年	33.6 (7.3)	4.076
	2年	35.5 (5.5)	
Q5 達成感	1年	33.8 (7.0)	2.375
	2年	34.9 (5.6)	

*<.05

る。

最後に、学年による「生き方受容」の差異について分析を行ったところ、「充実感」のみ1年生と2年生の差が有意であり、「肯定的評価」、「有能感」、「達成感」に学年による有意差はなかった(表8)。宮沢(1982)は、教育学部学生の自己承認や自己受容感は1.2年生では変化せず3年生になると高まるが、それは2年生の教育実習で子どもに受け入れられるなどの経験が影響していると述べている。本研究では、対象者の2年生は複数の実習を経験しており、1年生はまだ実習を経験していないことから、宮沢(1982)と同様に解釈ができる。これにより、仮説2は支持された。

職業につながる専門的な学修を始めることで、現在を肯定的にとらえることができ、さらにその学修を続けたり、就職先が決定することで、充実感が高まっているとすれば、養成校の教員として

は嬉しい結果であり、また、大学での学びと個人の成長や充実感について、一定の示唆が得られたと考える。

5. 考 察

本研究では、大学生が認知している親の養育態度と現在の満足度や未来への期待との関係について、2つの仮説を検証し、いずれもデータから支持された。

2つの仮説から、大学生は、所属学部の学修内容と将来の職業が結びついている場合、生き方受容が高まるのではないかと推測できる。PBI との関係を見ると、自立をうながすような、愛情のある関わりを受けたと思っている人が、生き方受容性が高いことが確認できた。ただし、この養育態度の評価は、大学生が小学生時代の保護者との関係について回顧的に評価していることから、敢えて、傾向差に当てはまらないケースを取り出してみた。傾向とは反対の意識を持つケースが一定数存在しており、保護者の養育態度への評価は変化するものであることから、必ずしも人生の充実感を規定するものではない。今回の結果から、幼児期の養育の重要性を示していると同時に、現在の充実感や将来への希望もまた重要な要因であるということを敢えて強調しておきたい。

過去の養育態度に対する思い方、考え方は、子ども期から青年期に移行する時期の大学生にとっては、過去に経験してきたことと、未来に向かって歩んでいる現在の心理状態などによって変化するものであろう。このことから、子どもの志向性や自己意識は態度のみによって作られるわけではなく子ども自身の経験や感じたことも影響すると考える。本研究では、子どもが認知する過去の養育態度と現在の自己について対象者に質問したが、時とともに変化する内容であると考え、経験したことや感じたことによって自己意識、志向性がどのように変わるのか本研究をふまえて見ていくことを今後の課題としたい。

謝辞

調査票調査に協力いただいた A 短期大学の学生の皆様に感謝申し上げます。

付記

本論文は、2023 年 3 月に頌栄短期大学専攻科に提出した「大学生の『充実感』と第一愛着対象者の養育に対する認知について」をもとに加筆修正したものである。調査設計を高山・永茂が行い、調査票の配付・回収・データ入力・クリーニング等のデータ収集と作成は永茂が中心となって行った。データ分析においては高山・永茂が共同で行った。結果の解釈については、本論文において高山が加筆修正を加えた。

引用文献

- 浴野雅子 (2015) 「親子臨床心理面接での親の情緒的発達と子どもの心の組成と関係」『広島文教女子大学心理臨床研究』6. 20-27
- 小川 雅美 (1994) 「PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性、妥当性に関する研究」(東京女子医科大学博士論文)
- 尾花真理子・倉田由美子・神崎亮佑 (2022) 「大学生の認知した親からの期待と養育態度がアイデンティティに及ぼす影響」『江戸川大学紀要』32. 165-174
- 厚生労働省編 (2018) 『保育所保育指針解説』フレーベル館
- 斎藤裕・斎藤暁子 (2021) 『ママ怒らないで。』ディスカヴァー・トゥエンティワン
- 島義弘 (2014) 「親の養育態度の認知は社会適応にどのように反映されるのか：内的作業モデルの媒介効果」『発達心理学研究』25-3. 260-267
- 常田秀子 (2015) 「発達に軽微な偏りがある 3 歳児の親子に対するペアレントトレーニングの有効性」『和光大学現代人間学部紀要』8. 157-167
- 戸田弘二 (1990) 「女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Model との関連」『北海道教育大学紀要. 第一部. C, 教育科学編』41(1). 91-100
- 二宮克美 (1994) 「大学生の自己受容性、充実感並びに親子関係の認知－質問紙調査結果の基礎的分析－」『愛知学院大学教養部紀要』42(1). 97-117
- 三川俊樹 (2002) 「生き方志向性の構造と生き方受容との関連」『追手門学院大学人間学部紀要』14. 87-120
- 宮沢秀次 (1982) 「女子青年の自己受容性と性格特性」『日本心理学会第 4 回大会発表論文集』297
- 森下正康・阿部恭子 (2013) 「母親と父親のかかわりの特徴と幼児の社会性発達との相互関連」『発達教育学研究 (京都女子大学大学院発達教育学研究科後期課程研究紀要)』7. 35-47
- 山下美実子・石晓玲・桂田恵美子 (2010) 「大学生の親子関係・自尊感情・生き方志向と子ども時代の養育

態度との関連：過保護という養護態度の検討』『臨床教育心理学研究』36. 21-26.

参考文献

- 佐久間（保崎）路子・遠藤利彦・無藤隆（2000）「幼児・児童期における自己理解の発達：内容的側面と評価的側面に着目して」11(3). 176-187
- 佐藤正恵・植田映美・小川香織（2010）「ADHD 児の保護者に対するペアレント・トレーニングの有用性について」『アルテスリベラス（岩手大学人文社会学部紀要）』86. 27-40
- 杉山登志朗（2018）『子育てで一番大切なこと 愛着形

- 成と発達障害』講談社現代新書
- 鈴木亜由美（2009）「幼児の仲間関係における自己主張表現」『広島修大論集』50(2). 107-115
- 西敏郎（2021）「幼児の人間関係とその構成に関する一考察－自己主張・自己抑制の観点から－」『足立短期大学紀要』41. 53-56

たかやま いくこ
 甲南女子大学人間科学部総合子ども学科助教
 なかも ころろ
 NPO 法人 S-space 児童指導員

参考資料

ここには何も記入しないでください

大学生の充実感と保護者に対する意識についての調査

【ご協力をお願い】

本調査は、大学生の「充実感」と保護者の養育態度に対するあなたのお考えをうかがうものです。お忙しいところお手数をおかけしますが、5-10分くらいでお答えいただければと思いますのでご協力をよろしくお願いします。

質問には、深く考えすぎず、感じたままをお答えください。答えたくない質問がありましたら、飛ばしていただいて結構です。

本調査は、A 短期大学における専攻科・研究計画等倫理審査の承認を経て実施しています。アンケートは無記名です。また、お答えいただいた内容は統計的に処理しますので、あなた個人のお考えとして分析されることはありません。また、アンケート用紙およびデータは頌栄短期大学における研究データ保存等に関する内規に従い、厳重に管理します。

ご回答は任意です。回答しないことであなたに不利益が生じることはありませんのでご安心ください。なお、ご回答をもって、本調査への協力を承諾いただいたことと致します。

ご回答いただいた結果は、修了研究としてまとめるほか、成果のまとめを大学改革支援・学位授与機構に提出します。結果についてお知りになりたい場合は、下記までお申し出ください。

ご不明な点やご質問がございましたら、下記までお問い合わせください。

【調査主体・お問い合わせ先】

永茂ころろ（専攻科2年）+++++@gmail.com

指導教員

××○○ +++++@+++++.ac.jp

記入が終わりましたら、2022年@月@日（@）までに
 α棟3階××研究室前のアンケート回収箱にご提出ください

問1. あなたの性別に○をつけてください。(1つに○)

1. 女性 2. 男性 3. その他

問2. あなたの現在の学年に○をつけてください。(1つに○)

1. 保育科1年 2. 保育科2年 3. その他

問3. 小学生のころ、あなたにもっとも影響を与えた保護者はどなたですか。1人選んで○をつけてください。(1つに○)

1. 母 2. 父 3. 祖母 4. 祖父 5. その他

問4. 問3で○をつけた保護者に対するあなたの考えについてお聞きます。以下のことがらについて、それぞれあてはまる番号に○をつけてください(それぞれ1つに○)。

	非常に そうだ	そうだ	ちがう	まったく ちがう
1. 暖かく、親しみのある声で話しかけてくれた	1	2	3	4
2. 私が必要とするほどは助けてくれなかった	1	2	3	4
3. 私が好んでしたいと思うことをさせてくれた	1	2	3	4
4. 情緒的には私に冷たいように思えた	1	2	3	4
5. 私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた	1	2	3	4
6. 私に優しく、慈愛があった	1	2	3	4
7. 私が自分自身で決定を下すのを好んだ	1	2	3	4
8. 私に成長してほしいしなかった	1	2	3	4
9. 私のすることは全てコントロールしようとした	1	2	3	4
10. 私のプライバシーをおかした	1	2	3	4
11. 私と物事について語り合うのを楽しんだ	1	2	3	4
12. よく私に微笑みかけた	1	2	3	4
13. 私を子どもあつかいしがちだった	1	2	3	4
14. 私が必要としたり、欲していることを理解しているようには思えなかった	1	2	3	4
15. 私自身に決定を下させた	1	2	3	4
16. 私は求められていないと感じさせられた	1	2	3	4
17. 取り乱しているときに気分をほぐしてくれた	1	2	3	4
18. 私とは多く話さなかった	1	2	3	4
19. 私を保護者に依存させようとした	1	2	3	4
20. 保護者がいなければ、私は自分のことを処理できないと感じていた	1	2	3	4
21. 私が望むだけの自由を与えてくれた	1	2	3	4
22. 望むだけ外出させてくれた	1	2	3	4
23. 過保護だった	1	2	3	4
24. 私を褒めることはなかった	1	2	3	4
25. 私が好むような服装をさせてくれた	1	2	3	4

問5. 以下のことがらについて、それぞれあなたの考えに近い番号に○をつけてください。(それぞれ1つに○)

	とてもよくあてはまる	あてはまる	どちらともいえない	あてはまらない	ほとんどあてはまらない
1. 私は、自分の生き方に満足している	1	2	3	4	5
2. 私は、自分の生き方が気に入っている	1	2	3	4	5
3. 私は、自分の理想とする生き方をしていると思う	1	2	3	4	5
4. 私は、自分の人生をすばらしいものにする自信がある	1	2	3	4	5
5. 私は、自分の個性を生かした生き方をしていると思う	1	2	3	4	5
6. 私は、自分の生き方に誇りを持っている	1	2	3	4	5
7. 私は、自分の人生を楽しんでいる	1	2	3	4	5
8. 私は、自分の人生において、与えられたことを積極的にこなしていける	1	2	3	4	5
9. 私は、自分の生き方にも足りなさを感じている	1	2	3	4	5
10. 私は、どんな生き方をすればいいのかよくわからない	1	2	3	4	5
11. 私は、これから先の人生を楽しみにしている	1	2	3	4	5
12. 私は、自分の思い通りの生き方をしていると思う	1	2	3	4	5
13. 自分の生き方に不満を感じることが多い	1	2	3	4	5
14. 私は、つまらない人生を送っていると思う	1	2	3	4	5
15. 私は、たとえ困難なことがあっても、何とかうまく生きていけるだろうと思う	1	2	3	4	5
16. 私は、こうありたいという人生の目的をはっきりもっている	1	2	3	4	5
17. 私は、充実した人生を送っていると思う	1	2	3	4	5
18. 私は、今の自分の生き方が、何か間違っているような気がする	1	2	3	4	5
19. 私は、どう生きていったらよいか困ってしまう事がある	1	2	3	4	5
20. 私は、自分の人生において、かなりことを達成してきたと思う	1	2	3	4	5
21. 私は、これから先も今のような人生を送っていききたいと思う	1	2	3	4	5
22. 私は、自分の人生においてやりたくないことばかりさせられているように思う	1	2	3	4	5
23. 私は、これまでの自分の生き方を後悔している	1	2	3	4	5
24. 私は、これから先の人生においても、かなりのことを成し遂げる自信がある	1	2	3	4	5
25. 私は、幸福な人生を歩んでいると思う	1	2	3	4	5
26. 私は、自分の人生において、多くの時間をムダにしているように思う	1	2	3	4	5
27. 私は、これから先の人生において、失敗するのではないかと不安になる	1	2	3	4	5
28. 私は、これまでの人生においてさまざまな困難を乗り越えてきたと思う	1	2	3	4	5
29. 私は、このままの生き方で人生を終わりにたくないと思う	1	2	3	4	5
30. 私は、世間から見れば成功した人生を送っていると思う	1	2	3	4	5
31. 私は、自分の生き方に自信がもてなくなることがある	1	2	3	4	5
32. 私は、これまでの人生において、後悔することが多かったと思う	1	2	3	4	5
33. 私は、自分らしい生き方をしていると思う	1	2	3	4	5

34. 私は、自分の将来の生き方など、どうでもよいことだと思う	1	2	3	4	5
35. 私は、これから先の人生が、もっとよくなるだろうと期待している	1	2	3	4	5
36. 私は、本当は今の人生とは違う生き方をしたかったと思う	1	2	3	4	5
37. 私は、自分の人生に生きがいを感じている	1	2	3	4	5
38. 私は、自分の生き方に、ふと疑問を感じることもある	1	2	3	4	5
39. 私は、自分の人生の目標を達成する自信がある	1	2	3	4	5
40. 私は、これから先に人生が、今よりもよくなることはないだろうと思う	1	2	3	4	5

本アンケートに対するご意見等がありましたらお聞かせください。

()

質問は以上でおわりです。

ご協力ありがとうございました。

××研究室前の回収 BOX にご提出ください。